図書館報

◆ 特集　図書館紹介 ……2～3
◆ 新任教員推薦図書 ……4～7
◆ 読書感想文コンクール ……8～14
◆ 図書館統計 ……15
◆ 郷土の文化財・編集後記 ……16

巻頭言

図書館長　焼山　廣志

オタマジャクシが、うまくカエルになれるのは…

オタマジャクシは、水槽に入れたままにしていると、ほとんどがカエルになる前に死んでしまう。だけど、そこに小石や小枝をちょっと置けば、ひと呼吸でき、うまくカエルになれるそうだ。

これは毎日新聞のコラム「余録」からの引用である。「余録」の著者は、昨年の自殺者数が７年連続で３万件台に達した事実、更にインターネットで知り合った若い男女が集団死する「ネット自殺」が急増している事を憂えてる最中、滋賀県の能登川町立図書館を訪れて大きな感銘を受けたと記す。続けて次のような一文が続く。

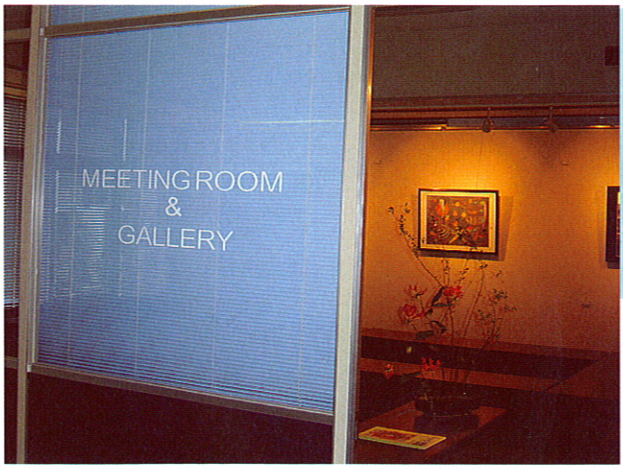
＞そんな小石や小枝のような「居場所」が今、社会から減っているのだろうか。図書館が、人々が多忙な日常から離れ、ゆっくりできる空間になればいい。美しい織物が掲げられ、風に揺れている図書館なんて、想像するだけでうれしくなる。(2005年6月6日　毎日新聞朝刊)

有明高専の図書館長に就任して２年を終えようとしている。先代の図書館長に遂行されて来たものに、何を新たに付加できるだろうか、と模索し、行き着いたものが本校の学生諸君の「居場所」作りだった。オタマジャクシがうまくカエルになれるよう、小石や小枝をあちこちに仕掛けたつもりである。大牟田美術協会会員のプロの芸術作品の生の迫力をじっくり心ゆくまで鑑賞するのもよし。リニューアルしたＡＶルームでインターネットの世界に浸るのもよし。新作のＤＶＤソフトで映画鑑賞をするのもよし。先の能登川町立図書館の才津原館長の言葉を借りるならば、「図書館はよりよく考え、生きるための場です。行き場のない人、ケンカしても隠れる場所がない人たちを孤立させず、自殺させない。それも図書館の役割です。」

そして、有明高専の図書館もそうであって欲しいと強く願う。

特集　図書館紹介

昨年度に引き続き、今年度も図書館は大幅なリニューアルを行いました。
ここでは新しくなった図書館を紹介します。



ミニギャラリー

セミナー室に展示用のレールや、照明用の可動式スポットライトを増設し、小スペースのギャラリーとしての利用も可能にしました。今後はいろいろな企画展示を行っていきます。

有明高専工房ギャラリー

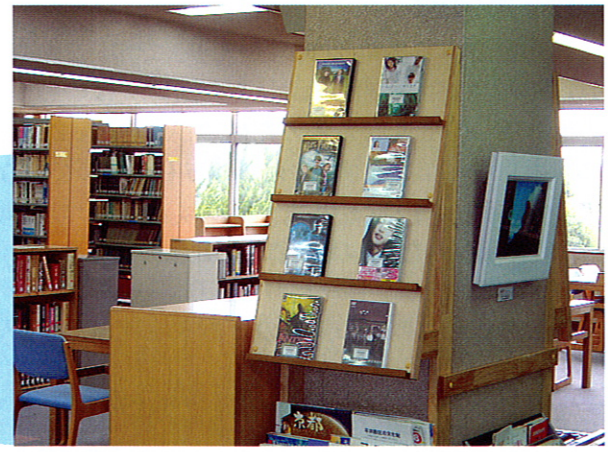
ロボコン参加のロボットなど、学生製作の作品を展示するスペースです。

工房ギャラリーより ロビーを臨む

張替が終わり、ロビーからつづく美しいパターン模様になりました。

絵画収納庫

入れ替えた絵画を収納するための棚です。年に１回程度、作品の入替を行っていきます。



資料展示スペース

新規に購入した図書やＤＶＤなどを展示するスペースです。

ＡＶルーム

ネットワーク接続のパソコンとDVDプレイヤーを設置しています。DVDには学習に役立つものに加え、映画作品も揃えていますので、自由に利用してください。

新任教員推薦図書

この数年で、新しい先生方がずいぶん多く着任されました。今回はその先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読ませたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦して頂きました。ご自身の経験を踏まえた「先生のお薦め」です。図書館にも揃えてありますので、手にとって先生の言葉を思いだしながら読んでみてください。

黄泉がえり

梶尾真治 著

機械工学科　岩本達也

私が紹介する本は、「黄泉がえり」です。この本は、10月8日に劇場公開された「この胸いっぱいの愛を」の原作者、梶尾真治先生の作品のひとつで、2002年に映画化されています。ご存知の方も多いのではないでしょうか。この本と出会ったのは、著者である梶尾先生の講義でした。その講義で、感想文の課題として（本屋で買って）読みました。

物語の舞台は熊本の阿蘇のとある地域。死んだ人が自分のことを想い続けてくれた人の前に、ある日突然、当時のままの姿で現われるというお話で、人を想う力の偉大さを改めて考えさせられた作品でした。

物語の最後には蘇った人がつぎつぎと消えていくのですが、一人だけ残る人物が居ます。講義の最後に先生は、その一人が残った理由を論理的に証明することができるとおっしゃいました。興味のある人は、図書館にもありますので、挑戦してみてはいかがでしょうか。

もう一度投げたかった

ー炎のストッパー・津田恒美 最後の戦い

山登義明/大古滋久 著

最後のストライク

津田恒美と生きた2年3カ月

津田晃代 著

機械工学科　篠崎　烈

本を読むことが、それほど好きではなかった私が、高専1年生の時に読んだ本です。この本からは、一人の人間の生き方を知りました。

みなさんの中で、広島カープ『津田恒美』という選手を知っている人はいますか？どんなバッターにも真っ向勝負で、打たれても打たれてもストレートを投げ続け、『炎のストッパー』と呼ばれていた選手です。津田は、82年に広島カープに入団し、抑えのストッパーとして活躍しました。しかし、豪快なピッチングとは逆に、『のみの心臓』というあだ名がつくほど弱い人間でした。彼は、ボールに『弱気は最大の敵』という言葉を書いて、ずっと持ち続けていました。91年まで広島の抑えのエースでしたが、『脳腫瘍』という病気にかかり、復帰を目標に2年半の闘病生活を送りました。しかし、広島球場でオールスター戦が行われている93年7月20日に32歳で亡くなりました。

この2冊の本に津田恒美という人間の32年間の人生が書かれています。野球に興味がない人でも、人間の生き方の一つとして読んでみてはいかがですか。

戦場のピアニスト

ウワディスワフ シュピルマン 著

電気工学科　森　山　賀　文

「アンネの日記」をご存知ですか？第二次世界大戦中、ユダヤ人の少女アンネ・フランクがナチスの迫害から逃れ、隠れ家に潜み生活していた際に綴られたものです。

同じ様な境遇にありながら、ワルシャワの廃墟の中を生き抜いた一人のユダヤ人男性がいます。ポーランドのピアニスト、ウワディスワフ・シュピルマンです。彼はドイツのベルリンに留学しピアノの腕を磨き、数多くのピアノ曲、管弦曲などを作曲し、母国での人気を高め、ワルシャワにあるラジオ局での仕事をしていました。

1939年9月、ラジオ局がドイツ軍の爆撃を受けたときも彼は生演奏をしているところでした。ポーランドはドイツに占領され、その後6年間、彼は家や財産を没収され、強制移住や大量殺戮といった戦争の恐怖を体験した末に、ドイツ軍将校によって奇跡的に命を救われます。

後に戦争中の体験を回想録として書かれたものが「戦場のピアニスト」です。民族や人種の違いにどれほどの意味があるのか、改めて考えてみるきっかけに読まれてみてはいかがでしょうか？

技術英語らくらく表現法

－これで十分150のポイント－

宮野晃 著

電子情報工学科　原　　武　嗣

科学技術が秒刻みで進歩しているといっても過言ではない現在、技術論文や研究装置等のマニュアルなど英語で読み書きする必要性は非常に高くなっている。私自身も学生時代には技術英語を用いて学術論文を書き、実験装置の英文マニュアルを使用して研究を行ってきた。最初は見慣れない専門用語や技術英語独特の文法等に全く対応できず、相当苦しんだことを覚えている。そんな時、恩師の先生に進められたのがこの本である。技術英語の読み書きの際、頻繁に使用される表現、英文の作り方等をうまくまとめてあり、さらに広いトピックスの専門用語が取り入れられた本である。当時の私に技術英語の読み書きができる自信・喜びを与えてくれた虎の巻的存在であった。「高専」の学生であるみなさんは、近い将来各専門分野のフィールドで活躍することと思われる。そして当然の如く技術英語に触れる機会が頻繁にでてくることではないだろうか。その時の入門書として是非この本はお勧めの一冊である。

復活！日本の半導体産業

（未来を拓く志）

大見忠弘 著

電子情報工学科　八　坂　三　夫

著者は、半導体業界でインテルを蘇らせた男と言われている東北大の大見教授である。第一部は「ニッポン半導体復活のシナリオ」と題し、大見先生が分析した日本半導体産業の繁栄と衰退の要因を辛辣且つ大胆に、そして、先生が現実の取組まれているプロジェクト等による復活へのシナリオを大見先生らしく「学問に裏付けられて、徹底的にやる」と迫力満点に語り、実にスッキリ明快である。日本の半導体産業復活に対する情熱が伝わってくる。先生が執筆されている時期、私も先生のプロジェクトに参加させて頂いていた。本の内容には思い当たる箇所も少なくない。そして第二部は「世界最先端の半導体の夢を追って」と題し、憧れと志だけで飛び込んだエレクトロニクス分野、半導体分野での研究開発者としての半生について、意外な少年期、迷える学生時代、大きな影響を受けた輪講会、西沢先生との関わりなどを通して、研究者として生きる事への決意から人間大見の実像が見えてくる。これから半導体以外の研究開発を目指す者にとっても、刺激となる書と思う。

日本人の英語

マーク・ピーターセン 著

物質工学科　小　林　正　幸

研究をしていると、最新の情報は英語ですし、発信する時は英語になります。

ですから、否応がなく英語とつきあっていかなくてはなりません。英語を読み書きする機会はよくあるのですが、未だに分からない英語のひとつが"a"と"the"の使い分けです。今でも、間違えて、しょっちゅう指摘されます。そんなときに勧められたのがマークピータンセンの「日本人の英語」という本です。英語が論理的に組み立てられているのに対して、日本語の曖昧さが指摘されていて、英語の前にもっと論理的な日本語を身に付けなければならないと感じさせられます。教科書みたいではなく、内容も難しくなく書かれていますし、英語というか英語という言語の背景を少し分かった気になれます。そして、この本を読むたびに、英語をもっと勉強しないといけないなと痛感するので、僕には、英語への勉強の思いを駆り立てられる一冊です。みなさんも是非読んでみて下さい。

百年の愚行

編集統括 小崎哲哉

物質工学科　上　甲　　勲

この本との出会い

2年前、私が当・有明高専に赴任することが内定し、“環境工学”、“化学工学”、“反応工学”等の授業を担当することを内示され、その準備を始めていた頃、一人のフォト・ジャーナリストから紹介され手にしたのがこの本“写真集”である。

この本の意義

この本は、20世紀に人間が行った愚行の数々を100枚の写真でとらえている。地球という限られた空間の仲に、一つの生物種“人間”が飛躍的に増大し、“他の生物種への圧迫”、人間同士の争い“戦争”を繰り返し、また、経済活動の結果もたらした“環境破壊”の状況等をそれぞれ貴重な1枚1枚の写真でとらえている。それぞれの映像を通して、私たち人間がいかに愚かなことを行ってきたかを知ることができ、20世紀の人間の歴史を振り返ることができる。

私が担当している“環境工学”の時間では紹介している本であるが、是非、多くの人がこの本“写真集”を手に取り、考えてほしい。このような愚行を二度と繰り返さないために、私たちは何をすべきかを。

べてるの家の「非」援助論

－そのままでいいと思えるための25章－

浦河べてるの家 著

建築学科　中　島　美登子

学生時代に私の指導教官から1冊の本を薦められました。それが、『べてるの家の「非」援助論』（浦河べてるの家著、医学書院出版）です。精神障害を持つ人たちの生活拠点「浦河べてるの家」は札幌市から車で約3時間の北海道浦河町にあります。ここは精神障害の人が地域で活動するための昆布加工・販売、書籍出版、高齢者への紙おむつの宅配、福祉機器レンタル事業など幅広い地域サービスを展開しています。昆布と精神障害を元手に稼ぎまくって、今や年商1億円、その評判をききつけ年間1800人が見学に訪れています。「安心してサボれる職場づくり」、「利益のないところを大切に」、「弱さを絆に」など、一般企業ではまず見られない活動理念を掲げる「べてるの家」では、誰かが頂点にいるピラミッド型の組織によってではなく、職員も利用者もお互いの「弱さ」を認め合い助け合うことで運営されています。組織の力によってではなく、一人一人の力を出し合うことによって、したたかに「金儲け」にいそしむ「べてるの家」を見ていると、こんな自営業型の「福祉」もありかもしれないと、ちょっと肩の力が抜けてゆく気持ちがします。是非、ご一読をお薦めします。

十二番目の天使

オグ・マンディーノ 著

一般教育科　鮫　島　朋　子

今回、私が紹介する本は、たまたま本屋で目に留まったというだけで、出会いとしてはいたってシンプルなものですが、ずっと手元に置いておきたいと思っている本です。それは、オグ・マンディーノ著「十二番目の天使」という本で、一人の男が、小さな男の子によって、生きる勇気を取り戻していく話です。

悲しい話なのですが、頑張ろうという気持ちにさせてくれる本です。最後まであきらめない、今という一瞬を一生懸命に生きること、そういう生き方を改めて教えてもらった気がします。最近、私は、今やりたいこと、今やれることを考えるようにしています。迷ったときには、今のシンプルな自分の気持ちを最優先に考えるように心がけています。皆さんは、今をどう生きていますか？勉強も、部活も、その他のことも、簡単にあきらめないでくださいね。

最後に、本の中で、いつも男の子が唱えている言葉です。

「毎日、毎日、あらゆる面で、僕はどんどん良くなっている！」

「絶対、絶対、絶対、あきらめない！」

君たちはどう生きるか

吉野源三郎 著

一般教育科　竹　内　伯　夫

私が高校生の頃に読んだ書籍の中でもっとも印象に残っている本です。当時、物理の好きな親友と二人で読み、事ある毎に感想を述べ合っていました。本の内容の奥深さに感動したことを今でもはっきりと覚えています。

書名だけ見ると文面も難しそうに思われるかもしれませんが、中学生のコペル君やその叔父さん達の物語になっており、とても読みやすいと思います。コペル君が自然科学や社会の原理について考えながら人間的に成長していく過程が分かりやすく描かれています。読者はいつの間にかコペル君の姿に共感を覚えていることでしょう。

この紹介文を書くにあたって約10年ぶりに読み返してみましたが、私自身もこの作品に登場する叔父さんのように、人生について熱く語れる大人になりたいと改めて思いました。1937年から読まれ続けている古典的名著であり、学生だけでなく教職員の方々にも自信を持ってお薦めする作品でございます。

独学のすすめ

加藤秀俊 著

一般教育科　田　中　彰　則

ある日の朝、メールのチェックをやっていると次のような内容の依頼メールが届いていることに気がついた。“新任の先生に本の紹介をお願いしています。”最近、専門書ばかり読み一般書を手にとることのなかった私は戸惑ったが、しばらくして頭に浮かんだのがこの本である。

題からも推測できるように、物事を学ぶ上での姿勢について論じた本である。

私がこの本に出会ったのは高校受験を間近にひかえた冬だった。

なぜこの本を購入する気になったのかはもう覚えていないが、学ぶということに関して自分自身で真剣に考えるきっかけを与えてくれた本だった。特に、学歴のなかった一人の女性がチンパンジーの研究を続け世界の学会に衝撃をあたえる業績を残すに至る経緯を紹介した部分は、常に頭の片隅に残り、方向性を失ったときの支えとなった。

今読み直してみると、賛成できない文章も多々見受けられるのだが、極々普通の中学生だった私が学ぶということを考えさせられた本である。

皆さんも、もし書店で見かけたら、パラパラとページをめくってみてはと思う。

平成17年度
校内読書感想文コンクール

感想文コンクール講評

図書館長　焼山　廣志

今年の有明高専の最大のイベントである体育祭も無事終わり、学校内もあの日の熱狂が嘘のように平静さを取り戻している。

一方、時節の方は11月を迎え、流石に、朝夕はめっきり冷え込むようになり秋の深まりを暫く味わえるようになった。「読書の秋」の到来である。それと期を一にして、恒例の有明高専の読書感想文コンクールの審査もやっと終え、入賞者を公表出来る時期となった。

今年は応募総数611篇、その内訳は1･2･3年生は原則全員応募の557篇、4･5年生は自由応募で四年生16篇、5年生38篇であった。昨年に比して若干ではあるが減少したのが惜しまれる。

クラス担任の先生方、図書館運営委員の先生方、そして国語科の先生方の協力を得て、第3次審査にノミネートされた35篇のうち、最終審査で入賞を果たした10篇の作品は、5年生から1年生の中からバランスよく選出されているのが今年の大きな特徴である。特に上級学年の学生諸君の作品が応募者の比率からして上位を占めているのは、「読書感想文」という表現形態を通して自己の主張を文字化する能力の深化を予期させるものとして喜ばしく思えた。一つの作品に我々が対峙する時、そこには読み手の全人格が自ずと反映するものであり、そこには、その読み手の今まで、そして今の生きざまの蓄積が投影されているものと考える。とすれば、上級生の学生が真摯に対峙したそれに、審査をする者を魅了するものが多いのも首肯できる。逆に低学年の学生諸君の今後の精神的成長が大いに期待出来るのではないか。

このことを裏付けるものとして、今回の入賞者が取り組んだ作品に『こころ』『人間失格』といった自己を真摯に見つめることを希求するものが多く選ばれていた事が挙げられる。

ここに、「今の若者は…」と言った通り一遍の形容では括れない多様の価値観を持つ学生が本校に多く在席している事に、大きな光を見る思いがした。

～入賞者～

■最優秀賞	物質工学科　3年	西嶋　沙紀	『春琴抄』を読んで
■優秀賞	2年3組	松岡　禎知	『こころ』を読んで
	2年4組	江崎ひかる	「こころ」を読んで
■佳作	建築学科　5年	黒田　侑香	太宰治（人間失格）を読んで
	建築学科　5年	重田真由美	『夏の庭』を読んで
	電気工学科　4年	氷室　貴大	『いま、会いにゆきます』を読んで
	電子情報工学科　3年	谷口恵利佳	「夏の庭」を読んで
	電子情報工学科　3年	二宮　啓聡	個人主義
	電子情報工学科　1年	長尾　美瞳	『人間失格』となった人間
	物質工学科　1年	荻島かおり	『地獄変』を読んで

入賞作品紹介

『春琴抄』を読んで

3年　物質工学科　26番
西嶋沙紀

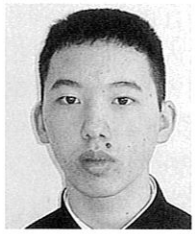
人間はこんなにも別の人間を愛せるものだろうか。これが初めてこの本を読み終えた時の私の感想だ。

美しかったが、我が儘で気難しい、盲目の三味線の名手、春琴。春琴に幼い頃から付添い、後に事実上の夫となったが、春琴の死後も、そして自らの死後をも師弟関係を貫いた佐助。正直、私は春琴を好きになれなかったし、その春琴を愛し、すべてを許す佐助を理解できなかった。

しかし私はこの本を一気に読み終えてしまった。そして一度本を閉じ、深く息をした。理解できない、そう思いながら私は再び本を手にとり、もう一度読み返し始めた。一字一字丁寧に読んだために、今度は時間がかかった。しかし今度は少しだけ理解することができた。佐助は春琴より四つ年齢が上だったが、精神的にはもっとずっと大人びていた。そして幼かった春琴を初めは妹のように、やがて自分の娘のように感じていたのではないだろうか。佐助の動作と言葉のひとつひとつが、春琴を愛おしく想う気持ちで溢れているように感じられた。その気持ちは、恋愛感情を超えた依存のような、信仰のような愛だと思った。後年、春琴の美貌が傷つけられると、佐助は彼女の面影を永遠に保有するために、瞳を針で指し自ら盲目の世界へ足を踏み入れた。しかしそれは美貌を失った春琴を見たくなかっただけではなく、ふさぎ込んだ春琴を元気づけるため、そして何より自信を失った春琴を佐助自身が見たくなかったためであろう。

最後にこんな文がある。「人は記憶を失わぬ限り故人を夢に見ることが出来るが、生きている相手を夢でのみ見ていた佐助のような場合には、いつ死に別れたともはっきりした時は指せないのかもしれない。」春琴を永遠に失った佐助の、どうしようもない喪失感や無力感に気づき、ハッとさせられた。そして胸が痛くなった。しかし、他の人間をあれ程までに愛し、愛された二人はきっと幸せだったと思う。私たちから見れば歪んでいるように見える形の愛。そのなかで二人は、その幸せをきっと誰よりも感じていただろう。

この感想文の最後に私は問う。私はあんなにも別の人間を愛することができるだろうか、と。



『こころ』を読んで

2年3組
松岡禎知

私がこの作品を取り上げたのは、人間にとって最も身近な部類に入る問題である、「エゴイズム」について描かれていたからである。身近ではあるのだが、その問題の重要性を考えたことは殆ど無いといっていい。ではこの作品の主題であるエゴイズムとは一体何なのか。この作品を何度か読み返すうちに、それが分かった気がした。

夏目漱石はこの作品に「裏切り」というエゴイズムを描いている。その裏切りは二つ存在しており、そのどちらにも「先生」が絡んでいる。根本原因となるのが叔父に裏切られること。そして先生を自殺という選択に追い込んだのがKを裏切ったことである。そのどちらが欠けても、作者は先生を自殺にまで追い込まなかったように思える。

「人が変わる」と言われている事象は主に二つである。一つは恋、そしてもう一つは金である。作品中には両方が描き出されており、それがもたらすエゴイズムを風刺している。人が変わるかどうかは人それぞれであるが、大抵の人が「変わる」ことを経験したことがあるのではないのだろうか。遺憾ながら、これらが絡むことで何らかの気持ちの揺らぎが生じるというのは、人間にとって自然なものであると感じてしまう。そのため、叔父が先生を裏切ったことも、先生がKを裏切ったことも、ある意味自然なことではあった。

しかし、この作品を最初に読み通したとき、私はエゴイズムの存在を否定したいと思った。描かれたエゴイズムが悲しく醜いものだと思ったからである。しかし、少し考え直してみると、前述した通り、エゴイズムが自然なものだと感じるようになったのである。そして、エゴイズムの一般的なイメージとは反対の、肯定という考え方をしたいと思うようになってきた。

「エゴイズム」という言葉が否定的に聞こえるのは、決して間違いではない。肯定を考えた今でもいい印象は受けない。しかし、人の行動の原動力となるものは、エゴイズムであるのだと思う。その上に他人に対しての思いやりや更なるエゴイズムを積み重ねて、自分の行動に表しているのだと思う。他人を思いやる気持ちにしても、それが自分のためにもなると知っているのではないだろうか。

エゴイズムとは何であるのかという疑問に対する答えは、人それぞれで変わってくるだろう。しかし、肯定しようと思う人は少ないと思う。それでも私は「生存するための摂理」として、エゴイズムを肯定したい。肯定という立場から、再びこの問題について考えていきたいと思う。これを発端として、恐らくまだ長い道のりの中で、本当にこれで正しいと思えるような答えに辿りつけたらいいと思う。但し、答えが人それぞれである以上、生み出した答えはあくまで自分だけのものになるだろうと思う。

「こころ」を読んで

2年4組
江　崎　ひかる

私はこの本を選ぶ時に、驚いた事がある。以前私が小学生の時この本を読んだ時には、この本を第三者として読んだ時には予想出来なかった事、あらすじを読み返すと――「先生」の遺書が私の中学生の時の事とよく似ているではないか！私は「先生」であった。

つまり、私は以前先生と形は違うが、信頼していた人から裏切られた事がある。そしてその後、友達と三角関係になった事があり、裏切りを知っている筈の私自身が友達を裏切ってしまったのだ。それ以来私は罪悪感と不信とで何もかもが怖くなった。だから先生の云う事、する事の全てが、自分を映しているようで、わかりすぎて息が詰まった。例えば人をはねのける事。もし誰かに好かれるとするだろう、しかしそれは一時の事で彼らはすぐに私の事を忘れ、結局残されるのは虚しい孤独な私だけなのだ。その姿を冷たい目で観察され、可哀想だとかばかだとか思われるくらいなら、最初から独りの方がいい。見ないで欲しい。しかしそれよりもっと恐しいのは、このような醜い私自身で、どうやっても逃げられないという事実…。そんな事をぐるぐると考えるのだ。時々浮かれて忘れる事があるが、すぐにまた自分自身を遠くから見つめ、客観的になった自らの声で、ハッと我に返る。誰のせいか？罪を犯した私のせいだ。さて、次にもっと共感できたのが、先生がKを裏切る時。私は好きな人と想いが繋がるなら友達がどうなってもよかったし、それ迄に友達と重ねた友情など忘れていた。自分が「醜い」という事は気付いていたが、それを更正する理性は、「好きだ」という気持ちには勝てなかった。先生よりももっと酷い事に、私は友達のほんの近くで、それも私が告白するではなく、告白されたのだ。あの時浮かれた自分が全く信じられない。その後私は友達がリストカットしているのを知った。友達の腕には白くなったスジが何本も入っており、私はその時初めて我に返ったのだ。ここからはこの本とずいぶん違う。私は泣いて謝り、友達は許してくれた。友達はKより私なんかより大人だった。それでも私が醜い事と、罪を犯した事には変わりはない。これからも私はそれに向き合わなければいけない。でも先生のように苦しむばかりではなく、償いと云うのは合わないかもしれないが、その為に生きたいと思うのだ。決して過去を忘れずに、葛藤しながらも闘って生きていきたいのだ。ここ最近ぬるくなっていた私にそれを再認識させてくれてありがとう。「こころ」

太宰治（人間失格）を読んで

5年　建築学科
黒　田　侑　香

自力で生活することができず、女のアパートを転々と転がり続け、カフェの女給と入水事件を起こしたあげく、酒と麻薬に溺れてとうとう脳病院に放り込まれた男。そんな男の生涯は、誰の目からみても、人生の敗北者として映るだろう。その男葉蔵も「人間失格。もはや自分は完全に人間で無くなりました。」と言っている。しかし、彼の手記を託せられたバーのマダムは、「神様みたいにいい子でした」と葉蔵を評しているのである。人間失格者が、その失格性故にかえって神格化されたのだろうか。葉蔵は、「子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に自分の家の食事でした。」と、手記の中で語っている。めしを食べることを「幸福」とも「喜び」とも感じられない葉蔵は、自分の幸福の概念と。世の中のすべての人たちの幸福の観点とが、まるで食い違っているような不安を感じる。つまり、食事によって代表されるような日常生活に対してさえ、疑いをもち、自分は社会的不適者であると苦悩する。食べること、寝ることが大好きな私からみれば、こんなことで思い悩むなんて不思議で仕方がない。幼いときにひどい食中毒にあって腹痛や下痢で苦しんだからというような明確な理由によるものなど、葉蔵の場合は原因があって食べることが苦痛なのではない。それは内から湧き出る思想である。この思想によって葉蔵は現実との違和感を持つ。そのために発狂しかけたというほど苦しむ。その結果として葉蔵が選んだ生き方が道化だった。無邪気を装い、おどけたお変人として次第に完成されていった。

周囲の人と会話が交わせないという、対人恐怖症的な劣等意識に苦悩している自分を隠し、その上おどけて振る舞うという、二重の苦悩は、彼にとっては耐えられない程のものだったと想像できる。葉蔵に心の安らぎを与えてくれたのは、淫売婦であり、非合法運動であり、銀座の大カフェの女給であった。白痴か狂人の淫売婦たちに、マリアの円光を現実に見たというのは、世間一般の価値と逆転しているように見える。しかし、ヒラメや堀木といった、ずるさを持った俗物に比べて欲も打算もない淫売婦たちは対極にいるのかもしれない。その淫売婦たちに聖性を感じた葉蔵の気持ちが私にも分かる気がする。葉蔵は、世間から日陰者と指を指されている人に対しては、自分でうっとりする位優しい心になるという。

人間を失格された葉蔵の「ただ、いっさいは過ぎていきます。」という、底知れぬ虚無感。太宰治もまた、死を前にしてこのような思いを胸に持っていたのだろうか。ふと、そんな風に思った。

『夏の庭』を読んで

5年　建築学科
重　田　真由美

「死んだら、その先には何があるのだろう。」
心臓が脈打つことを止め、体温が失われ、動かなくなる。ただそれだけなのだろうか、と考えることがある。輪廻という言葉があるが、生き物がただそこに生まれて、死んでゆくだけなら、魂なんて存在しないようにも思われる。

しかし人の生死に関しては、いろんな見方がある。それは宗教によって異なるものであり、人によって様々な捉え方があると思う。『夏の庭』を読んで、私の生死への捉え方は少し変化した。

生きるということ。この本に登場する三人の少年の生い立ちや、家庭の事情をつかんでいくうちに、生きることについて考えさせられた。

まず一人目、祖母をなくしたばかりの肥満の少年。この少年は、祖母のお葬式に参列し、屍となった祖母を直接目にしている。その少年の話がきっかけで、三人の少年たちは、一人暮らしのおじいさんを観察し始めることになる。肥満の少年は、初めてお葬式に参加し、衝撃を受けていた。私は未だお葬式に参列した経験はなく、それがどんなものか分からない。残りの二人の少年も、死した人に接したことは無かった。私も、そんな興味本位な「おじいさんが死ぬまでの観察」に引き込まれていく気持ちだった。肥満の少年は魚屋の息子で、おじいさんと交流を深めていくうちに、自立した心を持つようになる。家を継いで魚屋になろうと志す少年を通して、自分の将来について考えさせられた。

二人目は、両親が離婚し、母親と暮らす眼鏡の少年。少年の父は死んでいて、少年は、父のことをとても偉大で立派な人だったかのように、友人や周りの人々に話す。しかし物語の中盤で、実は少年の父は生きていて、再婚して別の家庭を持っていることが明らかになる、片親となって、強がりで父の存在を過大に話していたのだろうか。「おじいさん観察」を始めようと言い出したのはこの少年である。癇癪持ちのこの少年が、おじいさんと接触することで適応力を身につけていく様に、向上心というものを感じた。

三人目は、この物語で視点として書かれている「ぼく」。この物語の文章の端々で、少年の両親の不仲を感じ取ることがあり、読み進めるなかで気がかりとなった。この少年の心の変化は、最も共感できる部分である。私が幼かったころのこと…夜中に一人でトイレに行くのが怖かったことや、怖い夢にうなされるという経験を思い出した。忘れていたわけではないが、ふと振り返ると、なんでもなかった事のように思える。それだけ成長したということだろうか。この少年も、おじいさんとの交流で、成長したのである。おじいさんに関わる前までは、体だけが不自然に成長していたのだろう。この物語では少年の体の成長についてもよく描かれている。それがやがて、心も体も成長していった様子がよく伝わってきた。

死ぬということ。サッカーの合宿に行っていた少年たちがおじいさんの元を訪ねると、もう帰らぬ人となっていた。

少年たちと同様、私もおじいさんの死に動揺した。初めてこの物語を読んだわけではない。それでも「おじいさんの死」というものが。重く心に響いた。もっといろいろ話したかった。もっと何かしてあげればよかった。そんな少年たちの声に共感を覚えた。「おじいさんが死ぬまでの観察」だったはずが、いつのまにか少年たちは、おじいさんとともに生きていた。同じ時間を、空間を、共有していた。笑ったり、怒られたりしながら少年たちは、おじいさんの死という結末を経て、成長していったように思う。

生きているからこそ分かる、死の哀しみ。人と人が関わりあって生きていくからこそおとずれる、別れ。だからこそいま生きているこの時を、人と人とが共有しているこの時を、大切にしていきたいと思う。

『いま、会いにゆきます』を読んで

4年　電気工学科
氷　室　貴　大

アーカイブ星－それはよくある死後の世界ではなく、生きている誰かに「想われている」人だけが暮らす星。大切な人が死んでしまっても、自分が心の中で想っている限り、その人はどこかで生きているのだ、という希望を感じさせる星である。そして、その「相手を想う」という行為が、残された人にとって救いになるのだろう。

愛する妻は「アーカイブ星」へと旅立った。しかし、その一年後のある雨の季節、森の中で巧と彼の息子の前に現れた一人の女性は、間違いなく妻の澪であった。これは、梅雨の六週間の間だけに起こった、雨がもたらす奇跡の物語である。

巧は、温度や湿度、気圧の変化にも普通の人の数十倍も敏感であり、生活に不自由を抱えている。「映画館に連れて行きたかった。高いビルの上から二人で夜景を見たかった。」「もっと君にふつうの夫婦みたいに、ふつうにしてあげたかったんだ。」と澪に話す場面は特に心に響いた。特別な家族のことではなく、休日にやる普通の家族の姿。それが巧にとってはハードルが高いことで、何より澪にしてあげたかったことであった。何気ない普通のことがどれほど幸せかと考えさせられる。しかし、だからこそ巧は、欲望が希薄というか、あまり多くのものを望もうとせず、澪との、そして息子とのささやかな幸せを大切にしている。読めば読むほどにその純粋さに感銘を受ける。逆に言えば、色々なことができたりするほど、色々な選択肢があればあるほど、欲に駆られて大切なものを見失いやすくなるのかもしれない。

澪は交通事故で自分の未来を偶然知り、若くして死んでしまうことを知ることになるが、あえてその短い人生を選択し、決して自分の人生を悲劇的に考えず「ずっと幸せだった。」とはっきり言っている。死別を含めた人との「別れ」を悲観的に嘆くよりも、人生の中でどれだけの「幸せ」を見出せたかが大切なのだ。澪は短い人生の中でも、巧と息子と共に幸せな時間を過ごしたし、読んでいてそれが伝わってきた。巧もまた、「彼女のために強くあれ。」と再び彼女と出会う前までのどこか弱気な巧とは違い、未来への希望が感じられるようになった。「今」あるささやかな幸せを大切にして、そして「明日」からへの幸せを育んでいこう、そういった巧の志が窺える。

果たして自分は今まできちんとした人生を歩んできたのだろうか。澪や巧のように「今」を大切に生きてこられたのだろうか。「家族とのつながり」をしっかりと意識したことがあるのだろうか。この物語を読んで考えさせられたことはたくさんある。やはり、何気ないことでも、今までの自分を少しでも見つめ直す必要があるだろう。これからは、「明日」の自分たちの幸せのために「今」何をすべきなのかを考えられる自分で在りたい。

「夏の庭」を読んで

3年　電子情報工学科　21番
谷口　恵利佳

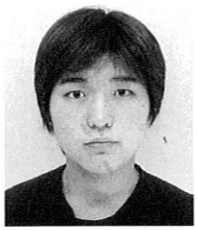
今、こうやって感想を書き始めて思うこと。それはこの本を手に取るなんて思いもしなかったということ。例年の私は『海と毒薬』『人間失格』など精神的にも肉体的にも痛い作品を読むことが当たり前になっていたと言っても過言ではないだろう。

今回、50冊もある対象図書の中からこの本を選んだのは、「家にあったから」という不純な動機からだった。

人の死という点においてはこの作品も。過去に読んだ二作も共通しているのだがこの作品を読み終えた後の清々しさというか爽快感は初めてのものだったと言える。

少しの好奇心と少しの興味から始まった少年達とおじいさんの付き合いは「おじいさんの死」という事で終わった。日々沢山の人が事故や事件など様々な事で亡くなっていくことと同じように、そのおじいさんの死もその日々の中の出来事の一つであったと言える。ここで少年達が予想もしていなかったことと言うのは、期待していた、人の死へのどきどきやわくわくといった感情ではなく悲しみという思いもよらなかった感情である。今まで彼らが体験したことのなかった身近な人の死は想像以上に辛いものだったのではないだろうかと私は思った。何故なら私自身も生まれてからこれまでの十八年間、身近な人の死というものを体験したことがなく、この物語を読み進めていく中で少年達に自分自身を重ね合わせていたからである。夏休み中、殆どと言っていい程一緒にいた人を思いもよらない時に思いもよらない形で失うのは、遠い国で面識のない人が沢山死ぬよりも深い悲しみをもたらす。少なくとも私自身には、だが。

おじいさんが亡くなったあとに遺族の人が少年達に金銭的なことを尋ねてきた時、大人が考えることは汚い、大人にはなりたくないなんて思った私はどちらかというとこの少年達寄りなのだろう。だが悲しみという思いもよらなかった感情の先に少年達はおじいさんとの付き合いの中で様々な貴重なものを得ている。しかもそれは強制されたものでなく、彼ら自身が自然と身に付けていったものである。今までの少年達の生活にはなかったことを経験することによって、ものの考え方に至っても大きな変化をもたらし、視点を変えて考えるということも学んでいた。そしてそれと同時に私自身も冷静に物事を見つめることができるようになったのである。少年達がおじいさんの死で沢山の物を得、それらを身に付け「大人」になっていったように私もこの作品を通していろいろな事に対する見解を得、「大人」に近付いたと言える。それを考えると不純な動機で読み始めたこの本も、実は私を魅きつける何かがあったからではないだろうか。こういった私を魅きつける何かが読み終えた後の清々しさ、爽快感を与えたのだと私は思う。



個人主義

3年　電子情報工学科
二宮　啓聡

読み始めは軽い気持ちだった。名著だという話は仄聞していたので、当時目をつけていたライトノベル同様、読書ノルマという形でその作品を見ていた。そして「両親と私」までは初心そのままに、活字を追う姿勢も頁をめくる心境も、ただただ機械的だった。

『こころ』の醍醐味に気づいたのは、構成される三つの章の最後、「先生と遺書」に入ってからのことだ。先生の告白により成るこの章は、有り体に言えば、先生の過去について書かれている。それも武勇伝だとか、自叙伝だとかいう大層なものではなく、ただ、淡々と過去の出来事を先生の視点で、だ。そんな話の普遍性が私を魅せた要因の一つなのかもしれない。そしてその普遍性が浮き彫りにする、人間の根本的な部分――エゴに私は深く共感させられ、作品に飲み込まれていったのだ。

憶測だが、作中の「私」と書生時代初期の先生とは共通する部分が多いと思う。「私」が先生に惹かれたのも、実はどこか本能的な部分で先生に自分の行く先を見たからではないだろうか。先生は彼のことを「疑るにはあまりに単純すぎるようだ」と評している。書生時代初期の先生もまた、「疑るにはあまりに単純すぎた」に違いない。

先生は書生時代に二回、大きな事件を経験する。その一つ目にあたる財産を巡る叔父の裏切りは無垢な先生の心に、懐疑という言葉を刻みつけたことだろう。そんな荒んだ心を癒すべく訪れた恋。しかし、その恋さえも、友人Kを自殺に追いこむという二つ目の事件に発展してしまう。善人と崇め信頼していた叔父の裏切りにより、どんな君子も悪人になる可能性を孕むことを悟った先生は、奇しくも次の事件では「K」を自殺に追いこむことになってしまう。「K」の死を目の当たりにして先生は死んだように生きることを決める。

ここで特筆すべきなのは、先生のとった言動は、同じ条件下におかれたとき私たちの価値観でも充分にとる可能性のあることだ。それはいわば、人間としての性――エゴであり、寛容な言い方をすれば「不可抗力」である。不可抗力のうちにあんな悲劇に発展するのだから、先生には運が悪かったとしか言いようがない。しかしながら、先生はそんな曖昧な結論を良しとしなかった。それが、月に一回の雑司が谷への墓参りと妻を愛するということの真意なのだと思う。

エゴに気づき、エゴを憎み、エゴと対峙した先生。妻を愛しながら、愛するが故に全て打ち明けられず苦しみ、理解させる勇気のないことに苦しみ、とにかくエゴに苦しみ抜いた先生。自らの過去を後世に託し、明治の精神に死にゆくことを決意した先生に一種のパトスを覚え、作中の「私」同様、これからの人生の糧にしようと思った。

『人間失格』となった人間

1年　電子情報工学科　23番
長尾美瞳

人間を失格となった人間、それは、一体どのような人間だったのでしょうか。

人間というものが全く理解できない葉蔵は、幼いころから、自分の意見を主張することが出来ず、しかし、それによって周りの人を落胆させたり、怒らせることを恐れ、ただひたすら周りの意見に愛想良く従う性格でした。人との対話に不安と恐怖を感じていた彼は、それでも人間を思い切ることが出来ず、人間とつながる方法として道化を演じることを考え出しました。そして、それは成長するにつれ、完璧なものに近くなっていき、より一層自分を出すことへの恐怖を強くしていきました。

私は、昔、自分が怒られたとき、それにはこういう事情があった、ということを説明できない子供でした。心の中でそう考えていても、叱られているうちに、その事情は全て言い訳のように思えて、自分はとても悪い子なのだと心から思っていました。また、自分の態度や発言によって、人が怒ったり落胆すると、泣きそうになったこともあります。実際に泣いたこともあるかもしれません。誰でも、このような経験はあるはずです。

では、何故彼は人間失格となってしまったのでしょうか。その理由は三つあると思われます。一つは、感受性が強すぎること。もう一つは、自信や勇気が持てなかったこと。そしてもう一つは、人間は、完璧に暮らしている、と思い込んでいることです。

私達は、完璧に生きているのではありません。お世辞を言ったりして、周りからよく見られようと嘘をつきます。自分でも気が付いていないうちに、人を傷つけてしまうこともあります。これらのことは、誰でも一度はやったことがある行為です。いえ、生活していく中で、必ずしてしまう行為です。しかし、私達はこれらの行為を、罪として考えることはなく、私達は清く明るく朗らかに生きているような自信を持っています。それが、人間です。

嘘をつくことは、絶対にいけない。人を傷つけることは、絶対にしてはいけない。これらは、絶対にいけないことですが、生きていくなかでは仕方のないことのように思えます。しかし、これらをすることに罪を感じ、いつまでも悔やんでしまい。自分は悪い人間だと思ってしまう心の優しい人も存在します。私には、どちらがより人間らしいのか、判断することは出来ません。

けれど、一つ私が言えることは、今まで生きてきたことは、全て正しかったのか、それとも間違っていたのか、それを悩むということは、人間だ、ということです。私は人間ではない。そうやって悩んでいくことこそ、人間である証ではないのか、とこの本を通して私は思いました。

『地獄変』を読んで

1年　物質工学科　9番
荻島かおり

人が地獄へ落ちるのは、自分が犯してきた罪をつぐなうため。では、人を地獄へ堕とすのは、一体何なのでしょうか。

良秀という男の描いた地獄変の屏風は、貴族から乞食まで、あらゆる身分の人間が恐ろしい程の呵責を受けています。そして、中でもひときわ恐ろしいのは燃えさかる牛車の中で悶え苦しむ女性の姿です。この女性は、良秀の頼みによって、生きたまま燃かれた良秀の娘を元に描かれていたのでした。これには、絵を仕上げるためなら他人が傷ついても構わないという良秀を懲らしめようとした、とか誘いを断った良秀の娘への恋の恨みなど、大殿様の様々な思惑が関係しているのです。

生きたまま焼かれた娘の苦しみ、そして、愛する一人娘を殺された良秀の悲しみは、まるで地獄で受けるものそのもののようではなかったのでしょうか。

一つの思いにとらわれてしまった人間というものは、とても恐ろしいものです。娘が焼き殺されながらも、その景色を見続け、絵を完成させた良秀も、人を焼くという考えを止めもせず、懲らしめるつもりで実行した大殿様も、人間です。しかし、私には彼らが人間のように思えないのです。

私が唯一人間らしいと思えるのは、良秀の娘に助けられ、可愛がられていた猿です。この猿は折檻を受けるところを良秀の娘に助けられ、それ以来、娘の側についてまわり、娘のことを見守り続けていたのです。娘が火にかけられて焼かれると、猿は自ら火の中に飛び込んでいったのです。

人間は、美しい部分ばかり持ち合わせているのではありません。汚い部分や醜い部分ももちろん、持っているのです、気に食わない人が地獄へ堕ちるのを喜ぶ感情というものも持っているのです。しかし、人が人を思う、その心を持っていなければ、それは人間ではないように思えるのです。あの猿のとった行動は、人間の行動だったと思いたいのです。

娘の焼き殺されるのを見て絵を描きあげた良秀、火をかけよと命じ、良秀の様子を楽しんでいた大殿様、燃えさかる牛車の中へ飛び込んでいった猿。彼らの姿は、人間というものを様々な角度から見た時の姿なのだと思いました。人を地獄へ堕とすのが人間ならば、それを憐れんだり、助けようとするのも人間なのだと、私はこの本を読んで思いました。

審査員講評

電気工学科　塚本 俊介

今年も、読書感想文を読ませてもらえる幸運に恵まれた。多くの作品を読み進めていくと、それぞれの学生の表情（性格？）が、頭の中に浮かんできて楽しい。丁寧な文章を書く学生、ちょっと乱暴ではあるがどきりとさせられる鋭い切り口の学生、完全に文学に浸っている学生、どれもそれぞれに楽しい。学生時代を思い出して、ひとつ書いてみようか。読書は、やっぱり素晴らしい。

物質工学科　永田 和美

今回、私は初めて審査員をさせていただきました。羅生門、こころ、高瀬舟…などなど、私も在学中に習った作品についての感想文が多く、懐かしく思い出しながら読ませていただきました。そして、あなた達と同じ年の頃と今とでは、同じ作品を読んでも違った感想が湧いてきている自分に気がつきました。大人になり、色々な視点から物を見れるようになったから？

また、同じ作品でも10人読んだら10通りの感じ方があり、自分と近いものもあれば、全く違ったものもあります。読書感想文を読む、すなわち他人の考えを聞く、ということも、自分の視野を広げる絶好のチャンスです。入賞作品は特にいいものが揃っていますので、じっくり読んでみて下さい。また違った感想が浮かんでくるかもしれませんよ。

一般教育科　岩本 晃代

感想文の審査に毎年携わっていて感じることは、いきいきと自分の考えを表現している感想文がある一方で、あらすじをなぞるだけのものも多いということです。きっと、どうにか表現したいと努力しても、なかなか感覚や感情を言葉に置き換えることができなかったのでしょう。

読み終わったら、心に浮かんできたことを、まずは書き出してみることをおすすめします。単語だけでもよいのです。次に「なぜ」「何に」「どのように」自分は感じたのだろう、と自問してみてください。単なるメモが、次第に肉付けされた素材になってくるはずです。最後に全体の組み立てです。文章の構成も、ものづくりと本質的には同じであることがわかるでしょう。

入賞した感想文は、この「ものづくり」の手法がうまく活かされています。ぜひ参考にして、来年もチャレンジしてください。

電子情報工学科　八坂 三夫

荒筋を追うだけでなく、自己体験に重ね、自分の考えを深めた感性溢れる良い作品が多く、審査するのに苦労致しました。残念ながら、今回入賞できなかった皆さんは、来年は入賞できるように頑張って下さい。

過去の受賞作

※学年は受賞時の学年

年度	最優秀賞	優秀賞		
平成７年	『こころ』について 電気工学科　2年　塚本　貞也	良秀に学ぶ人の生き様 物質工学科 1年 森田　玲子	『こころ』を読んで 物質工学科 2年 笹井恵美子	
平成８年	「晩年の子供」を読み 建築学科　2年　坂上　美穂	「野菊の墓」を読んで 建築学科 1年 吉富　冥子	「アンネの日記」 物質工学科 2年 江崎奈都子	「光抱く友よ」を読んで 建築学科 2年 前岡いづみ
平成９年	「野火」 建築学科　1年　木庭　綾	「風立ちぬ」 物質工学科 1年 梅原　幸	「地獄変」を読んで 建築学科 1年 大橋　景子	「こころ」を読み終えて 建築学科 3年 松村めぐみ
平成10年	「地獄変」を読んで 物質工学科　4年　田川　勇気	伊豆の踊子 建築学科 3年 坂口　麻子	「地獄変」芸術の昇華 建築学科 3年 柳　聖子	
平成11年	伊豆の踊子－幼き日の恋－ 建築学科　2年　山下　麻凡	「夏の庭」The Friends 建築学科 3年 前田　圭子	夏の庭 物質工学科 3年 三浦　志穂	「月と六ペンス」を読んで 電気工学科 3年 福山　祐佳
平成12年	アルジャーノンに花束を 建築学科　4年　宮崎　綾	自分らしく生きる 電子情報工学科 5年 平川　理江	「夏の庭」について 建築学科 4年 近藤　薫	
平成13年	「斜陽」を読んで 機械工学科　5年　高井良祐美	光抱く友よ 電気工学科 5年 近藤　洋平	「ビルマの竪琴」を読んで 建築学科 2年 東　優子	
平成14年	「沈黙」を読んで 物質工学科　1年　山本　弓	今だから先人に学ぶべき 電気工学科 5年 立山　茂憲	「風立ちぬ」 建築学科 3年 吉田　沙織	
平成15年	『破戒』を読んで 物質工学科　2年　山本　弓	『ライ麦畑でつかまえて』 建築学科 4年 吉田　沙織	死とは 電子情報工学科 2年 津崎　英里	
平成16年	『晩年の子供』を読んで 電子情報工学科　3年　津崎　英里	『春琴抄』を読んで 電子情報工学科 3年 山本　弓	『夏の庭』を読んで 物質工学科 3年 南　康洋	

図書館統計

平成16年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	21	26	24	20	22	24	24	22	20	23	21	271
入館者数 総数	3,964	3,892	6,606	4,330	3,249	5,431	4,847	5,735	4,068	4,466	5,269	2,859	54,716
(内夜間)	(843)	(1176)	(1755)	(701)	(0)	(1599)	(1039)	(1872)	(891)	(1038)	(1672)	(213)	(12799)
(内土曜日)	(131)	(271)	(505)	(322)	(0)	(760)	(312)	(367)	(142)	(59)	(246)	(0)	(3115)
1日平均	165.2	185.3	254.1	180.4	162.5	246.9	202.0	239.0	184.9	223.3	229.1	136.1	201.9
貸出冊数 総数	680	726	783	779	362	570	882	904	589	721	662	187	7,845
(内夜間)	(158)	(209)	(189)	(165)	(0)	(150)	(197)	(296)	(142)	(263)	(196)	(7)	(1972)
(内土曜日)	(41)	(70)	(21)	(43)	(0)	(63)	(39)	(18)	(27)	(14)	(38)	(0)	(374)
1日平均	28.3	34.6	30.1	32.5	18.1	25.9	36.8	37.7	26.8	36.1	28.8	8.9	28.9

分類別図書貸出冊数の推移

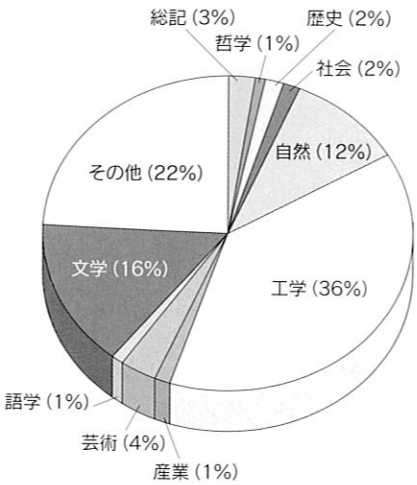
年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成12年度	232	102	180	122	784	2,391	101	209	52	1,124	996	6,293
平成13年度	207	77	192	138	943	2,520	67	443	44	1,376	1,459	7,466
平成14年度	274	92	183	124	929	3,099	96	299	53	946	1,726	7,821
平成15年度	283	70	113	72	907	2,995	34	208	61	924	1,891	7,558
平成16年度	167	109	107	126	815	2,792	30	289	62	1,452	1,896	7,845
平均	233	90	155	116	876	2,759	66	290	54	1,164	1,594	7,397

*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

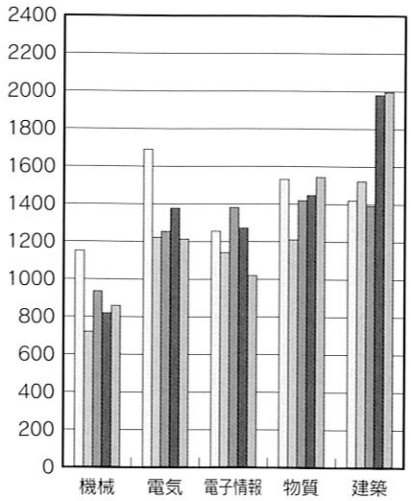
利用状況の推移

年度	開館時間	利用登録状況				入館者数		貸出冊数				1日当たりの数値		1人当たりの数値	
		総数	(内学生)	(内教職員)	*(内学外利用者)	総数	(内夜間土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間土曜日)	*(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成12年度	265	1,216	992	156	68	68,633	11,848	6,293	5,813	1,771	100	259.0	23.7	5.9	5.2
平成13年度	279	1,304	1,043	187	74	80,735	12,658	7,466	6,815	1,898	87	284.4	26.8	6.5	5.7
平成14年度	277	1,288	1,044	182	62	75,466	14,903	7,894	6,876	1,906	407	272.4	28.5	6.6	6.1
平成15年度	277	1,312	1,065	182	62	71,983	16,145	7,488	6,617	2,393	123	259.9	27.0	6.2	5.7
平成16年度	271	1,300	1,054	182	64	70,630	15,914	7,845	7,670	2,346	175	260.6	28.9	7.3	6.0

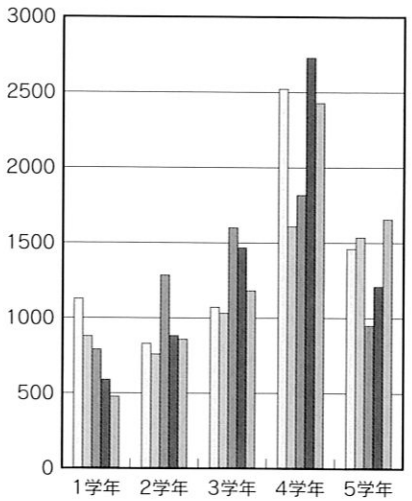
分類別貸出冊数（平成12～16年平均）



学科別図書貸出冊数（学生のみの数字）



学年別図書貸出冊数（学生のみの数字）



□平成12年 ■平成13年 ■平成14年 ■平成15年 ■平成16年

有明高専図書館報 No.11 2005.12.20発行
編集／図書館運営委員会
発行／有明工業高等専門学校

〒836-8585 大牟田市東萩尾町150 TEL0944-53-8613

郷土の文化財

福岡県指定有形文化財 水田天満宮本殿　寛文12年（1672）筑後市大字水田

水田天満宮には菅原道真が祀られていますが、17世紀頃までは老松宮と称していました。水田の地は鎌倉時代には太宰府天満宮領であり、そこに建つ老松宮（水田天満宮）は太宰府天満宮との強い繋がりを古くから有していました。現在の本殿は寛文12年（1672）に再建されたもので、正大工は太宰府から来ています。

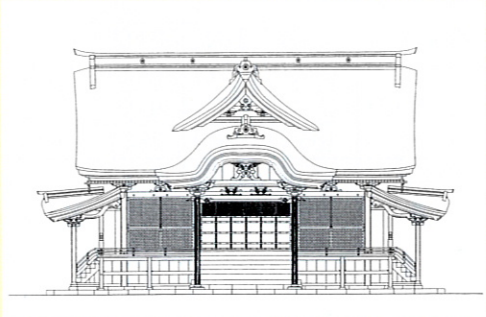
本殿は柿葺の３間社（背面５間）両流造で、屋根の正面に千鳥破風が付き、向拝は向唐破風造で、両側面に唐破風の車寄せがあり、変化に富んだ外観を見せています。

梁間４間は、正面から外陣、その奥２間の内陣、更に奥の中央３間×１間の内々陣に分かれています。その空間的な区別は床の高さや天井の形式にも現れており、宮殿を安置している内々陣の手前には縁が取り付けられています。内陣では祝詞奏上などが行われ、外陣は祈祷などの場合の一般の人々の着座の場所となっています。内部・外部とも柱をはじめ木部には朱漆を塗り、一部には黒漆を用いて鮮やかです。

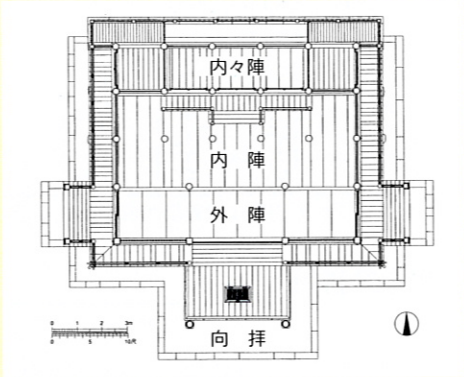
唐破風の向拝及び両側面の車寄せ、拝殿がなく外陣を一般の人々の礼拝の場とするという特色ある形態は太宰府天満宮本殿（天正19年　1591）と共通しています。しかし、道真公の屍を祀る太宰府天満宮の内部と水田天満宮の内部では大きな相違があります。但し、このような根本的な相違があっても、床の高さを変えたり、内々陣の手前に縁を設けたりすることは共通しています。

中世に建設された本殿は記録から三間四方で、本殿の前に幣殿と拝殿が建っており、現在の形態とは全く異なっていました。従って、寛文12年再建の本殿では、太宰府天満宮との歴史的な強い繋がりを類似した形態をとるということで表現したのではなかろうかと考えることができるでしょう。

水田天満宮本殿は、福岡県内で数少ない17世紀の遺構の一つで、規模が大きく、特色ある形態をしており、貴重な本殿です。平成4～7年に保存修理工事が行われています。　（建築学科　松岡高弘）



正　面　図



平　面　図

左側面の車寄

正　面

向拝から内部をみる

編集後記

今回で本校の図書館に勤務を初めて３度目の図書館報の発行です。この３年弱の間に、焼山図書館長、瀬戸前図書館長のご尽力を得て、図書館はどんどんと設備が充実し、資料が増え、心地よい空間を提供できるようになってきました。今号では昨年に続き、新しくなった図書館の紹介を特集しています。また、新たに赴任された先生方に学生諸君へ薦める本を選んで紹介文を書いて頂いてます。ぜひ、「先生のお薦め」を一読してみてください。図書館では、新年より、ギャラリーにて、企画展も開催される予定です。まだまだ拡がる有明高専図書館の今後に注目してください。

（図書係長　青木良秀）